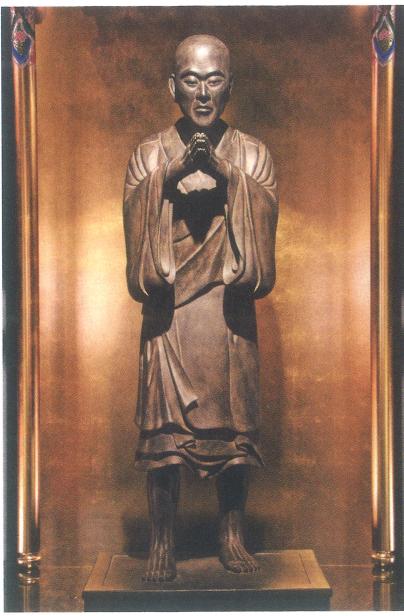


円覚

令和2年 春ひがん号

329号

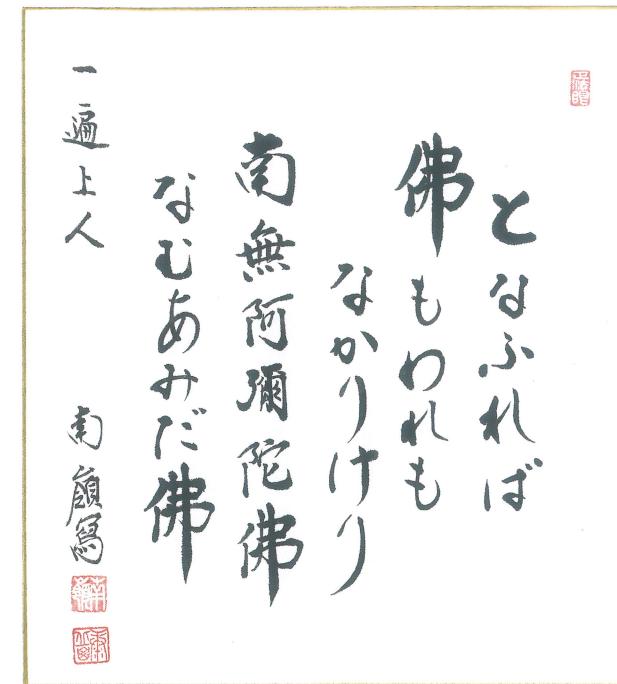
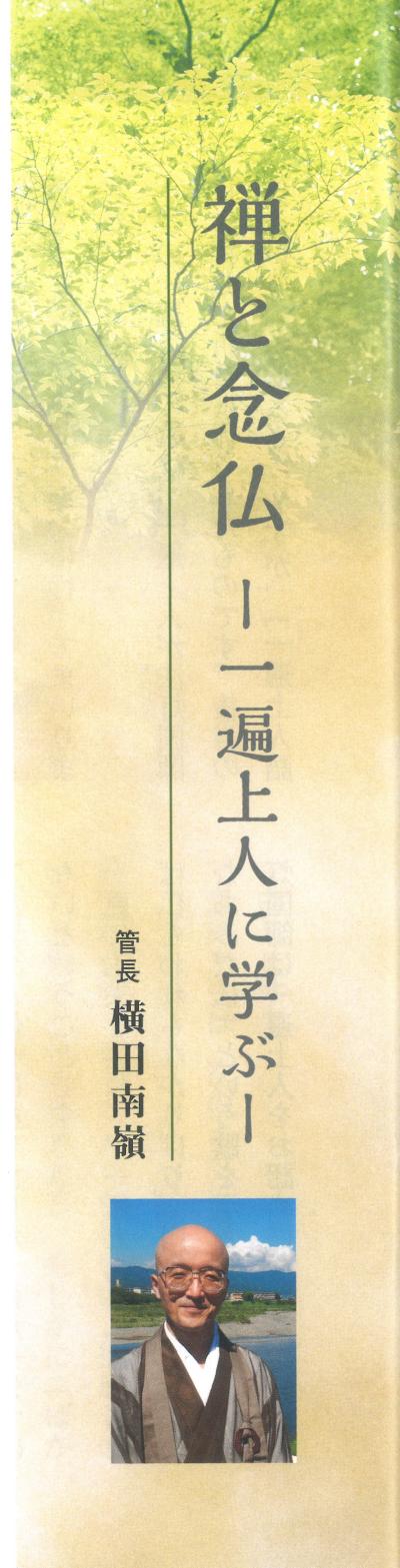




この歌を見ると、いつも思い出す。それは
ある年のこと、あの朝比奈宗源老師がいられ
た鎌倉の円覚寺を訪ねた時、門のところにこ
の歌を大きく書いて掲げてあった。まあ禅寺

「となふれば仏もわれもなかりけり
南無阿彌陀仏 なむあみだ仏

坂村真民著『一遍上人語録—捨て果てて』の
中に、次のような一節があります。



円覚329号目次

管長猊下 色紙	表紙II
禅と念仏／横田 南嶺	1
俳句的死に方(二)／長谷川 権	10
中世文学と禅(二)／田中 徳定	18
信心ことはじめ ㉙	26
東洋医学の肺炎予防方法／桜井 竜生	28

表紙・裏表紙写真／内田一道

に一遍上人の歌がと思いながらも、そこが禅のいいところだと、しばらく足をとどめてなつかしく眺めていた。」

おそらく、昭和四十五年の夏のことであろうと思います。仏教を学び、禅に参じて、更に一遍上人の心を受けついで詩を作られた真民先生には、禅の教えも一遍上人のお念佛もひとつものになっていたと思われます。

不思議なご縁で、昨年神戸にある禅寺で、この一遍上人の歌をしるした歌碑が建立されて、その除幕式と講演会に行つてまいりました。

この一遍上人の歌は、一遍上人が法灯国師に参禅した折りに作られたものです。後世の作という説もあるようですが、『一遍上人語



兵庫県神戸市臨済宗南禅寺派宝満寺
一遍上人の歌碑 菅長揮毫

録』にも記載されていますので、その記述に随います。

一遍上人は神戸の宝満寺におられた法灯国師(心地観心)に参禅されました。その折りに法灯国師は、「念起即覚」という問題を与えられました。念が起こったならば、速やかに目に覚めよという教えであります。

その問題に対しても、一遍上人は、最初「となふれば仏もわれもなかりけり 南無阿弥陀仏の 声ばかりして」という歌を示されました。法灯国師はその歌をご覧になつて「未徹在」と仰せになりました。まだ十分ではないということです。

更に工夫を重ねて、一遍上人は「となふれば仏もわれもなかりけり 南無阿弥陀仏 なむあみだ仏」という歌を示されたところ、法灯国師は一遍上人をお認めになつたというの

であります。

真民先生は、次のように解説されています。
「つまり声ばかりしての歌は未徹底であり、南無阿弥陀仏なむあみだ仏の歌は、徹底していく合格だというのである。たしかに「ばかりして」という言葉は、歌ことばとしても良くない。夾雜物が感じられ、澄んでいない。……おそらく一遍上人のどこかに、まだ無が無念になりきつていらないものがあつたであろう。そこを未徹在と言つて突き放したのである。」

「声ばかりして」の歌では、まだ念佛している自分と阿弥陀様との間に隔たりがあると感じられます。後者の歌は、南無阿弥陀仏一枚になりきつているのです。

歌碑の建立された神戸のお寺というのは、

宝満寺といって、法灯国師の御開山であり、一遍上人との問答がなされたお寺でもあるのです。そんな由緒のあるお寺ですので、一遍上人との問答が行われたことを多くの方にも知つてもらおうと歌碑が建立されたのでもありました。

宝満寺の和尚は、南禪寺派の布教師としてもご活躍の方であり、私もよく共に研修をさせていただいて、数年前に法話にお伺いしたご縁もあって、歌碑の字を私が揮毫させていただき、除幕式とその記念講演を務めさせてもらつたのでした。

宗派にこだわる方からすれば、禅の寺に念佛の歌碑など建てるのはもってのほかと思われるかもしれません。

しかし、真民先生の著書にありましたように、朝比奈宗源老師の頃に円覚寺の門のところ

ろの、おそらく掲示板にこの歌が書かれていたというのですから、昔から禅では南無阿弥陀仏であろうと、真理を詠つていれば気にならないところがあるのです。

一遍上人というお方は、私ども禅宗からみても実に禅的な方だと思っています。また私自身は特別な思いをもつて親しみを感じています。

私は、まだ高校二年生の時に、真民先生と手紙のやりとりをして、真民先生から『一遍上人語録』をいただいて愛読していました。

一遍上人に親しみを覚える点は一つあります。一つは、一遍上人は私のふるさとである熊野権現様に参籠して念佛の教えについて啓示を受けられたこと、そしてもう一つが、私が参禅をしていた和歌山県由良町の興國寺を開山された法灯国師に参禅をされたことの二

つであります。

一遍上人は、延應元年（一二三三九）のお生まれで正應二年（一二八九）に五十歳でお亡くなりになっています。伊予（愛媛県松山市）の豪族である河野家の次男としてお生まれになっています。

十歳の時、母が亡くなり、父の命によつて、仏門にはいりました。太宰府の聖達上人のも

とで浄土の教えを学ばれました。そこへ父の訃報が届いて帰郷されました。八年ほど暮らして、親類間のいざこざがもとで、一遍上人が襲撃されるということもあり、一念発起し、故郷伊予を旅立ちました。最初に訪れたのは信州の善光寺でした。更に故郷へ戻り、窪寺という閑室に籠り一人念佛三昧の修行を行なされました。

このときに、阿弥陀様は十劫という遠い昔に成仏されたのだが、十劫の昔の成仏と今の一念の念佛とは同時であると気がつきました。そうしますと、極楽とこの世は同じことでどこにいても阿弥陀様の教えに浴することができるという確信を得られました。そして、文永十年（一二七三）三十四歳で岩屋寺での参籠を経て、家や土地など一切を捨てた遊行の旅に出られました。

一遍上人は遊行で出会った人々に「南無阿弥陀仏」と書かれた念佛札を配られました。これを「賦算」と申します。そんなお念佛のお札を配つて遊行していく、熊野で出会つた一人の僧に念佛札を受けるように勧めたときには、自分は信心が起こらないので受け取れないと拒否されました。そこで一遍上人は熊野本宮に参籠して、熊野権現の啓示を受けられました。



熊野権現様が示されたのは、「念佛を勧める聖よ、どうして念佛を間違えて勧めているのか。あなたの勧めによって、すべての人々がはじめて往生するのではない。南無阿弥陀仏ととなることによつてすべての人々が極楽浄土に往生することは、阿弥陀仏が十劫という遠い昔、正しいさとりを得たときに決定しているのである。信心があろうとなからうと、心が淨らかであろうとなからうと、人を選ぶことなくその札を配るべきである。」といふものでした。

なぜ念佛の教えを熊野の権現様が示されたのか、なぜ念佛の教えを求めて熊野に参籠されたのか不思議に思われるかもしませんが、熊野の本宮は阿弥陀様が仮に姿を現したものだという信仰がありました。この熊野権現の教えを受けたのが、一遍上人三十五歳の

ときであり、時宗の始まりでもあります。そののち四国、中国地方、京都、信州、関東、東北へと一處不居の生涯を送られました。そのように全国各地を巡り、十六年間で二十五万一七二四人の人に念佛札を配つたというのです。

そして正応二年（一二八九）数え年五十一歳の時、神戸の觀音堂（現・神戸市兵庫区、真光寺）において示寂されました。

一遍上人は亡くなられる直前に、所持していた經典を書写山円教寺の寺僧にお渡しになり、その他の書物は『阿弥陀經』をお読みになりながら焼き捨てられました。五十一年の生涯で一冊の著書も残そうとはされず、ひたすら全国を遊行し「南無阿弥陀仏」の念佛札を人々に配る旅を続けられました。

そんな心境を「一代の聖教みな尽きて南無

阿弥陀仏となりはてぬ」と仰せになつています。そのようなお姿から「捨聖」と呼ばれています。

「我体を捨て南無阿弥陀仏と獨一なるを一心不乱といふなり。されば念佛の称名は念佛が念佛を申なり。」と一遍上人は仰せになつていて、それは、自分の身体を捨てて南無阿弥陀仏とひたすら一つになるのを一心不乱といふ。毎回の念佛は私ではなく念佛自身が唱えているというのです。

柳宗悦氏はその著『南無阿弥陀仏』の中で、法然上人、親鸞上人、一遍上人の三師の念佛を次のように比較されています。「淨土宗では、身命を阿弥陀に捧げる意。真宗では、阿弥陀の勅命に順う意。時宗では、阿弥陀の命根に還る意。」として説かれ、更に続けて、「一は吾らより阿弥陀へ、二は阿弥陀より吾ら

へ、三は吾らと阿弥陀と未だ分かれざる根源へ」と示されています。

一遍上人の念佛は、私たちも阿弥陀様も区別は無い、吾と阿弥陀と分かれる前の根源に帰る、吾と阿弥陀と一体になつたお念佛であるということもできます。実に禅的な念佛であります。

そのようにすべてを捨てて、吾を捨て離れて阿弥陀様と一つになつて念佛すれば、「よろづ生きとし生けるもの、山河草木、吹く風、立つ浪の音までも、念佛ならずといふことなし。」というのです。山も川も草も木も、吹く風も立つ波もみな念佛だというのであります。實に禅で説くところの、すべては皆仏心の現れだというのと同じであります。

真民先生は、五十歳の時に、一遍上人のお誕生地である宝嚴寺にある一遍上人のお像に

触れて、自分は一遍上人の後を受け継いでゆこうと決意されました。ただ今の時代では、南無阿弥陀仏のお札では多くの人は受け取つてくれないであろうからと、ご自身の言葉で詩を作つて、多くの人に配られたのでした。真民先生が、一遍上人のことを詠つた詩を紹介します。

一遍智真

捨て果てて

捨て果てて

ただひたすら六字の名号を

火のように吐いて

一處不住の

捨身一途の

彼の狂気が

わたしをひきつける

六十万人決定往生の

発願に燃えながら

踊り歩いた

あの稜々たる旅姿が

いまのわたしをかりたてる

芭蕉の旅姿もよかつたにちがいないが
一遍の旅姿は念佛のきびしさとともに
夜明けの雲のようにわたしを魅了する

瘦手合掌

破衣跣の彼の姿に

わたしは頭をさげて

ひれ伏す

禅も念佛もひとつになつたところを学びたいものであります。区別するのではなく、その根源に向かつて学ぶことが大事だと思っています。



お彼岸です。お墓参りと共に、坐禅であるうと、念佛であろうと、觀音様を念じることであろうと、それらを通して仏陀の教えを学んで欲しいと願います。